# 「わたしのにほんご」実践を振り返って

今回の実践（5）では、次のような「三つの目標」が立てられている。
（1）「文型」や「表現（機能）」から出発するのではなく、「状況のなかで言語とコミュニケーションをとらえる」教育実践を理解し、実現する。
（2）1人ひとりの学習者にとって「＋1」になる活動を組み立て、実践する。
（3）学期開始時に立てた「私の目標」を達成する。
（Moodleにより、（3）は適当にまとめたもの）

本稿は、筆者が日本語教育実践授業（5）（以下、実践（5））で考えたこと、気づいたこと、達成できなかったことを三つの目標にわけてまとめたものである。本稿の構成は、以下の通りである。1.では、なぜ小林先生は実践（5）で目標（1）を設定したのかについて書く。次の2.～4.では目標別に授業内で得た学びと気づきについて書く。5.では2.～4.を簡単にまとめてから、自分の意見を簡単に書く。

## 1. はじめに

文法論や小林先生の論文をまだ読んでいない方にとって、目標（1）はやや抽象的で、理解し難いかも知れない。目標（1）が具体的に何を指しているのかを説明する前には、なぜ小林先生は実践（5）で、目標（1）のようなものを立ったのか、その理由から説明する必要があると考える。そのため、ここからは小林先生の論文の一部を扱い、そこで筆者の個人的な解釈を加え、目標（1）で求められている「状況の中で言語とコミュニケーションをとらえる」を説明していきたい。
小林先生がこの実践（5）を立ち上げた理由は、次の通りである。

> 「「わたにほ」を立ち上げた動機は、構造シラバスや機能シラバスに基づくコースデザイン、コミュニカティブ・アプローチにおける一連の教室活動に限界を感じたためである。」（小林 2016:142）

ここで書いてある「教室活動に限界を感じた」ことは何を指しているかというと、次のようなことである。（詳しいことは小林2009、2016、2017を参照して欲しい）
① 教室内で行われているロールプレイには「約束ごと」[1]によって支えられている
② ロールプレイには共感できない状況が設定されており、ゴールもすでに指定されている。
他にも色々挙げられているが、今回は主にこの二つだけを扱うことにする。
①が話している内容が指しているのは、「先週は〇〇について学んだので、今回のロー

[1] 「約束ごと」とは、「教師の思惑とそれをくみ取る学習者の想像力」（小林 2009：105）のことである。

ルプレイで〇〇を使えばいい」と考えている学習者、あるいは「この間、〇〇について教えたので、今回のロールプレイではこれらが使えるようなものにしよう」と考えている教師のことである。このような問題が存在するため、学校で行われているロールプレイやシミュレーションなどは、学習者のコミュニケーション力を高めることはできず、ただ先週学んだものを確認することしかできない場合もある。これが、会話授業における「教室活動の限界」の一つである。

②が指しているものは二つがある。一つ目は、「共感できない状況」で、二つ目は「ゴールが指定されている」である。一つ目の内容は何を指しているのかというと、例えば、家の経済状況が良くない学習者がいるとしよう。その学習者は自分の生活費や学費を稼ぐために毎日一所懸命バイトをしなければいけない。一方、学校などで行われているロールプレイでは、「友達を誘って、コンサートに行く」のような状況が設定されており、そこで何かを話すことを求めている。しかし、もし本当に金銭的に余裕がない学習者がいるとすれば、彼にとって友達を誘って何かをする時間もあまりないし、コンサートに行く金もないはず。このように、ロールプレイでは学習者にとってあり得ない状況がしばしば設定されている。これが、「共感できない状況」のことである。「ゴールが指定されている」ことは何かというと、上で話した「友達を誘って、コンサートに行く」を例としてあげれば、リアルでは必ずしも「友達を誘って、コンサートに行く」という確定がないということである。そもそも、筆者は今までコンサートに行ったことがない。友達を誘って、酒を飲んだり、おしゃべりをしたりすることはある。しかし、学校で行われているロールプレイでは、必ずしも何らかの目的が設定されており、必ずしも学習者一人ひとりが友達を誘ってコンサートに行くわけではない、ということである。これが、「ゴールが指定されている」が指しているものだと考える。

上述のような問題が存在するため、日本語学校などで行われるロールプレイやシミュレーションでは、学習者のコミュニケーション力の向上に役に立たない。①の解釈でも話したように、ロールプレイでは単なる語彙や表現の確認、あるいは学んだ表現の復習くらいにしかできない。その理由は、どれだけ状況や場面を設定していても、現実世界の方がはるかに複雑で予測しにくいからである。このような複雑で予測しきれない現実世界で、学習者達が生活できるように支援するためにも、一人ひとりの状況のなかで言語とコミュニケーションをとらえ、授業をデザインする必要があると小林先生が考え、実践（5）を立ち上げたと考えている。

## 2. 「文型」や「表現（機能）」から出発するのではなく、「状況のなかで言語とコミュニケーションをとらえる」教育実践を理解し、実現する。

### 2.1 担当の話す授業「Lesson7_説明する」に関して

実践（5）では、「話す授業」と「打つ授業」が設けられている。それぞれ、「5 回＋復習 1 回」総計 6 回になっている。今学期は実践（5）を取った人が多かったため、筆者は話す授業の「Lesson7. 説明する」だけを担当することになった。その理由としては、昔ある交流会の TA に勤めたことがあり、会話授業に興味があったからである。また、教職経験がなかったため、自分が得意なところを担当しようとしたところもあった。

1.で述べたように、教室内で行われているロールプレイなどでは、一見みれば学習者のコミュニケーション力を高められるように思われるが、実は学んだ言葉や表現における確認、すなわち「「文型」や「表現（機能）」から出発する」ことであるのを述べてきた。なぜ、教育現場ではそのような教え方をしてきたかというと、その裏に含まれているのは、おそらく「このような場面で、このような表現ができれば無難」と言った考えが含まれているからだと考える。

しかし、もし学習者のコミュニケーション力を高めようとすれば、こういった学習者一人ひとりの個性を消し去る「無難」だけでは、物足りない。そのために、学習者が状況によって表したい自分を表せるようにするのが、実践（5）「話す授業」の真の目標ではないかと考える。なぜ、「打つ授業」はここに含まれていないのかは後で述べる。

それでは、「学習者達が自分の「状況から出発」し、自分が言いたい日本語が表現できるようなコミュニケーション力を高めるために、何をすれば良いだろう」と悩む方も少なくないだろう。

答えは簡単で、教室を「何かを教えるの場」として捉えるのではなく、現実世界の一部として捉えることである。小林先生からも似たような感じで「「本気（ガチ）で学習者とコミュニケーションを取る」「本気で学習者に興味を持つ/持ってもらう」という姿勢が大切です」（Lesson7_準備の moodle により）とコメントをもらったことがある。

すなわち、教師が授業で本気を出して学習者とコミュニケーションを取ろうとし、彼らが悩んでいることについて適切に日本語の支援を行えばいいということである。ここで重要なのは、自分を「「一人の教師」としてではなく、「今まで日本で生きてきた人」として日常生活での自分を思い出しながら、学習者に言語支援を行う」（Lesson7_準備の moodle により）ことである。

このような授業の形は教師にとって理解しにくい授業である一方、学習者にとってもかなり理解できない授業になりかねない。なぜかというと、学習者の立場に立って考えてみれば、このような授業では「教師は何も教えてくれない」ということになってしまうからである。実は、「何も教えてくれない」というわけではないが、確かに「担当の教師は何も教えてくれない」という形になってしまうため、授業で何をどうすればいいのかが分からなくなる恐れがある。

そのため、担当の教師としては、導入部分で念を入れて準備する必要以外にも、授業の段階別にしっかりした説明、すなわち「この段階では、これについて話します」などの説明が必要である。

## 2.2「打つ授業」に関して

2.1 で「話す授業」は、学習者一人ひとりの個性を消し去る「無難」だけでは、物足りないと述べながらも、「打つ授業」は必ずしもそうでもないと述べていた。この節では、これについて補充説明を行う。

今回の「打つ授業」では、大まかに「SNS」と「メール」二つに分けられる。日常生活で人と話す場合でも、「目上の人」に対しては丁寧に話さなければいけない、「上司には...」などの決まりがあるが、必ずしも学習者達は「上司・目上の人」に対して話すという状況がないため、それらを統一して教えることはできなかった。しかし、これに比べて「SNS」と「メール」の部分には、ある程度ルールが決められている。特に「メール」の本文以外の「件名」、「始まり」と「結びの挨拶」では、書き方ほぼ決められているため、学習者

が表現したい言葉だけを教えるだけでは済まない。これについて、小林先生からも「電子メールは、（SNS の普及により）公的、フォーマルな色合いを帯びてきます」（221218 の L11_教案により）と指摘している。すなわち、社会的合意が高い場合では、自分らしさを表すことが難しくなり、あるいは「自分らしさが「無難」」（小林、同上）になる場合があるということである。

今回の「打つ授業」に関しては、ほとんどの場合、「書き方が決められている」、「社会的合意が高い」のような特徴が含まれていたとも言えよう。

## 2.3 実践（5）で教師に求められている能力

2.1 と 2.2 の内容を踏まえて、「話す授業」と「打つ授業」で指している「状況のなかで」の「状況」には、「学習者が直面される様々な状況」みたいな外的な要素が含まれている状況と「自分の気持ち/日本語力によって言葉を選ぶ」のような学習者中で常に変えていく内的な状況が含まれているのではないかと考える。

そのため、教師が事前に全ての状況を予測し、授業をデザインするのはまず不可能である。なぜかというと、例えば、「朝、友達と学校で会った時」を考え始めれば、友達と関係が良いかどうか、喧嘩したかどうか、その日友達の機嫌が良いか悪いか、自分の機嫌は良いか悪いか、などなど、数えきれない状況が挙げられる。これらを全て事前に準備し、学習者に説明するのは現実的に考えれば不可能である。

そこで、小林先生からも同じく、先行シラバスで授業を準備しても、学習者達がすでに知っている可能性があり、「説明する」というコミュニケーションに必要な言語項目は必ずしても筆者が準備したものだけではないと指摘された（「221115_説明する」moodle により）。

それでは、「教える内容をすべてあらかじめ準備、把握し、授業を管理する」（小林 2016: 158）ことができなくなるとしたら、教師に求められる能力は一体なんなんだろう、と思う方も少なくないだろう。これについて、小林先生は実践（5）で、求められる教師の文法教育能力は、「「目の前の学習者の頭の中で起きていることを知り（洞察力）、自らが持っている文法知識、言語分析力を駆使し（瞬発力）、相手に届くように伝えられる（説明力）」という動的な文法教育能力」（講義 221111 により）であると主張している。

すなわち、先行シラバスで授業をデザインするのではなく、後行シラバスとして授業をデザインし、授業内で受けた学習者の質問に対して、いかにわかりやすく説明することが実践（5）で求められている教師の能力だと考えられる。

## 3.1 人一人の学習者にとって「+1」になる活動を組み立て、実践する。

担当の授業をデザインする当初では、レベル別に授業を立てようとしていた。実践（5）の授業を取っている学習者のレベルはかなり差があったため、授業内容が難しくなると、レベルが相対的に低い学習者には役立たないし、簡単しすぎるとレベルが比較的に高い学習者にとっても「＋1」になれなかった。そのため、前半は簡単なものを設計し、後半では比較的に難しいものにしようとしたのだが、小林先生に「学習者達も成人です。日本語がわからないだけで、知的レベルが高くないというわけではないですよ！」と言われた。

この段階までは、「状況から出発する」についての理解が低かったため、「私は何をど

うすれば良いんだろう」と思うようになった。これは、この段階までは学習者に「+1」になる活動は、担当の先生が何かを教えることによって、全体的に「+1」になれると考えていたからだ。

当時は筆者から何も教えなくても、学習者一人ひとりが困っている状況、あるいはまだ解決できていないことを事前課題で把握し、それを教室に持ってきて、たまご先生と一緒に解決することでも「+1」になれることを、知らなかったというわけである。

すなわち、授業で学習者が「+1」になれるようにするには、担当の先生より、他のたまご先生の役割がはるかに重要になってくるということである。しかし、ここでは、担当のたまご先生は何もしなくても良いということではない。授業内で「+1」になれるようにするには、1. でも話したように、念を入れた授業デザインと、授業では何をするのかを学習者に具体的に説明する必要がある。しかし、より重要なのは、担当以外のたまご先生に授業で何をして欲しいということをきちんと伝えることである。授業活動 1 でのたまご先生の役割は何か、この授業で具体的にどのような支援を行なって欲しいのか、また、なぜこのような授業活動を立てているのかなどを、事前にしっかりと伝える必要がある。そうでなければ、授業で何をすればいいのかが分からず、学習者と共に迷ってしまう恐れがあるかもしれない。もし、本当にこのようなことが起こってしまえば、学習者に「+1」になることも不可能である。

## 4.「私の目標」について

学期開始の頃、私が立てた目標は次の通りである。

① 授業中で分かりやすくゆっくり話していたかどうか。声の大きさは適当だったかどうか。不十分なところがいたかどうか。
② 授業をサボる学習者がいないように、できるだけ面白い授業を行うこと。

（「「私の目標」を書き込む掲示板です」により）

なぜ、これらの目標と立てたかというと、1. 教職経験がなかったため、一番基礎的な部分からしっかりしようとしたから、2. 授業がどれだけ学習者の役に立てられるだとしても、授業中で内職したり、内容を聞かなかったりしたら、そこまでだと考えていたからだ。

今になって、なぜ当時このような目標を立てていたのかと思う。それぞれの目標は、よく達成できたと考えるが、もうちょっと良い目標を立てたら、それを達成するためにより一所懸命に頑張ることができたのにと後悔している。しかし、これも今になってできる話であって、当初の自分にはこれらを考えることもできなかったと思う。

目標を見てすぐにわかると思うが、当時の筆者は自分の担当授業のことだけを考え、目標を立てていた。しかし、今になって考えれば、実践（5）で立てられる「私の目標」は、自分の担当授業以外にも、色々立てられると考える。例えば、他のたまご先生の授業でどう振る舞うか、授業をデザインする際に何を注意するかなどなど。

## 5. 今後の方々へ

1. では、目標（1）と、なぜそのような目標が立てられていたのかについて説明し、小林先生が実践（5）を立ち上げた理由における筆者の解釈を書いた。2. では、担当した「話す授業」から述べ始め、筆者が考えている「状況のなかで言語とコミュニケーションをとらえる」授業をデザインするために注意すべき点、またそこで教師に求められる能力について書いた。3. では筆者が考えている「一人ひとりの学習者にとって「+1」になる活動」とは何か、またそのような授業をデザインするために、注意が必要なところは何かについて書いてみた。4. については、目標を立てる際に、担当以外の授業における目標についても考えるのも悪くないについて、書いた。

ここからは、今後の方々へのメッシーである。

実践（5）は、常にたまご先生と話し合いながら、それぞれの授業をデザインし、実施するような形で進んでいる。そのため、教案を作る際、常に疲れるし、時には意見が一致していないためむしゃくしゃになったりすることもよくある。しかし、振り返ってみれば、皆の作業にも意見を出したり、コメントしたりしたので、それが「状況」の理解に役立っているのではないかと考える。また、一緒に教案を考えたため、授業で予想通りに行けなかった時も、すぐに気づくことができ、次の教案を考える時の参考にもなる。もちろん、大変だと思うが、それなりの価値があるのではないかと考える。

最後は筆者の感想である。

実践（5）はかなり疲れる授業ではありますが、めっちゃくちゃ面白いです！1 回しか担当できかったのですが、思ったより色々考えさせられて、学びが多かったと思います。もし、日本語学校などで行われている会話授業について不満、あるいは違和感を覚えている方がいれば、是非この授業を取ってみてください！

## 参考文献


小林ミナ（2009）「教室活動と「リアリティー」」, 小林ミナ、衣川隆生（編）, 水谷修（監）『日本語教育の過去・現在・未来-第 3 巻-教室』、凡人社、pp. 94-128.

小林ミナ（2016）「複言語・複文化時代の日本語教育における日本語教師養成」, 本田弘之、松田真希子（編）『複言語・複文化時代の日本語教育』第 6 章、凡人社、pp. 135-162.

小林ミナ（2017）「「状況から出発する」アプローチ」,『早稲田日本語教育学』(22)、pp. 101-131.